

荒谷 卓(あらや たかし)
生年月日:昭和34年秋田県出身
略歴:昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。
海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



日本の戦闘者

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表: 荒谷 卓



日本の戦闘者として、第一に挙げるとすれば楠正成である。その精神、行動、生き様すべてが第一等の日本武人であり、世界にも類を見ないほどの戦略思想を持った戦闘者である。楠正成は、鎌倉時代の末から南北朝時代に生をなし、大阪府南河内郡千早赤阪村を基盤とした豪族である。先ずは、その戦略思想から見てみる。

戦略論と言えば、世界的にはプロイセンのクラウゼヴィッツの『戦争論』と中国の『孫子』が有名だが、いずれも政治的意思の対立関係にある相手に対し、敵は敵、味方は味方という対立的発想の域を出ていない。

これに対して、楠正成の戦略は、政治的意思の対立関係そのものの転換にまで目を向けている。簡単に言えば、敵を味方することを最良とする戦略を具体的に説いているのだ。

たとえば西洋のチェスが敵のすべての駒を取り去ることを勝利としているのに対し、日本の将棋は敵の駒を取って味方につけ、相手の「玉」を追い詰め、数手前で降参させるのに似ている。

「大楠公遺訓」から彼の軍略を一部紹介する。

兵を学ぶ法は、心性を悟り庶民を親愛するを上とし、計謀によって学ぶを中とし、戦術をむさぼり習うを下とする(中略)。

将に徳あるときは、敵の兵必ず我兵となり、敵の民我民となる。

将に智あるときは、敵の謀我謀となし、敵の利もまた我利となる。

将に勇あるときは、敵の威我威となり、敵の能我能となる。

この三徳を以て、明らかに方法を明察し、敵の謀に乗じて、却ってこれを覆す、これ名づけて上将の軍法とす。

中将は、自らその徳を積まず、その功を求め、ただ敵の謀を察し、その計略を欺き、我謀を多くして、敵を殺さんことを用いて、敵の生するところを知らず、十度戦いて十度勝と言えども、未だかつてその太平を知らず、これ中将の法なり。

下将は、ひとえに戦いを好んで、利を争い、士民を使うに怒りを以てし、人を従えるに専ら殺罰を用い、己の勢いを頼んで敵の智謀を悟らず(以下略)。

楠正成が「上将」としたのは、「心性を悟り庶民を親愛する」兵法、つまり優れた将の戦

略として、庶民との一体こそがもっとも大事だというのだ。国が弱体化し滅びるときは、国を統治する者と国民の思いが大きく乖離するものだ。統治者が自己権力の維持のため国民の意志を無理やり一致させる常套手段としては、国の外に共通の敵を創ることだが、これは国家を疲弊させ破綻する。統治者は、国の向かうべき理想を国民と共有し、国民の生活実情とその思いに真摯に対応しなくてはならないのだ。

「中」の将は、徳も智も勇のバランスが欠如しているものだから、仮に戦で十戦十勝しても、国を豊かにして世の中を平和にすることなどできない。現在の米国に対テロ戦略がこれに該当する。米軍はテロ対策の戦術として対反乱作戦(COIN:Counter Insurgency)で対処し、民衆を味方につけようという構想を示してはいるが、彼らが現地で実際にやっている作戦行動は、味方まで敵に回すような行為が多い。米軍は、対テロ作戦と称して、他国の住民の家に武装して押し入り、不審者を拷問し、無関係の人まで巻き添えにして殺傷し住民の恨みを買っているのだ。これでは、自らテロリストを養成しているようなものだ。

「下」の将に至っては、調和どころかあたりかまわず戦いを仕掛け、対立を作るばかりで、結局は自滅すると楠正成は指摘しているが、もしかしたら現在の対テロ戦争は、「下」の将の範疇に入っているのかもしれない。なぜ、普通の人々が自爆テロのような行為に走らざるを得ないのかという原因を考えず、ただその行為を批判しても、問題は解決しないのだ。

楠正成の素晴らしいところは、孫子のような物書きではなく、自分の軍略を自分で実践し成功していることだ。当時の鎌倉幕府は、蒙古を除けば世界最大規模の軍事力を動員できた。現に、当時世界で、蒙古の度重なる侵略を実力で跳ね返したのは鎌倉幕府のもとに統合された日本軍だけである。その鎌倉を相手に政府転覆を成し遂げたのが楠正成である。しかもその兵力は1,000人にも満たない。

その力の源は、天皇への忠義である。いったんは九州に敗退した足利勢が勢力を回復して再び京へと進軍。正成公は情勢を冷静に判断し戦に勝ち目なく後醍醐天皇の京脱出を奏上するが受け入れられず、必敗の戦へと出陣する。この折、嫡男正行公(10歳)に「生

きて会えるはこれが最後。父が討ち死にすれば天下は尊氏になびくだろう。しかし、身命生き残らんがため忠烈を失い降参することのなきよう、一族全員義を貫き忠に死せ。これが汝の第一の孝行である」とて訣別した。

そして、数万の大軍で押し寄せる足利軍から包囲されかけた南朝軍主力の新田勢を離脱させるために、数百の部下を従えて敵の指揮官足利直義に向かい突撃、敵勢のど真ん中で

全滅するまで半日戦い抜き、最後は弟楠正李と刺し違える。

正李公「七生まで唯同じ人間に生まれて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ」正李公「我も斯様に思ふなり。いざさらば、同じく生を替えて此本懐を達せん」と。

楠正成最後の妃は、現在、神戸市の湊川神社となっている。



廣田勇介 撮影

